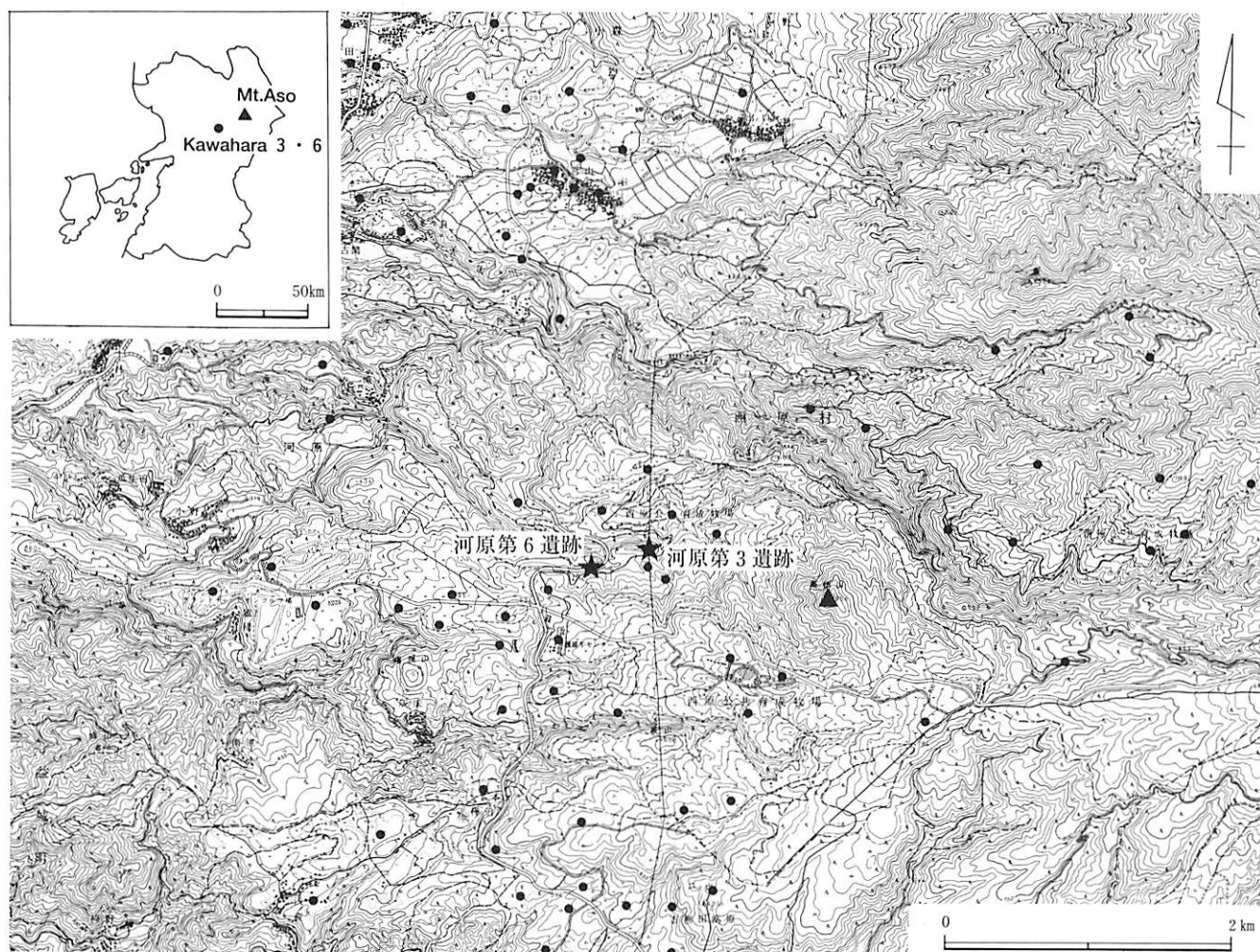


Ⅱ 河原第3遺跡4・河原第6遺跡1



本文目次

一 調査の目的と経過	1
二 調査の成果	2
A. 河原第3遺跡	2
1. 層序	2
2. 遺物の出土状況	3
3. 縄文時代以降の遺物	3
4. 旧石器時代の遺物	4
(1) 遺物の出土状況と分布	4
(2) 遺物	5
B. 河原第6遺跡	6
1. 層序	6
2. 遺物の出土状況	7
三 まとめ	8

挿図目次

第1図	河原第3遺跡調査区設定図	1
第2図	土層断面図及び土層観察表	2
第3図	縄文土器実測図	3
第4図	第2文化期遺物分布図	4
第5図	第3・4文化期遺物分布図	5
第6図	出土遺物実測図(旧石器時代)	6
第7図	河原第6遺跡調査区設定図	7
第8図	各トレンチ層序比較図	7

表目次

第1表	第5次調査出土石器組成表	3
第2表	河原第6遺跡土層柱状図及び土層観察表	7

図版目次

図版1	<河原第3遺跡>	図版2	1 旧石器時代の遺物(河原第3遺跡)
1	7トレンチ遺物出土状況(東から)		<河原第6遺跡>
2	8トレンチ遺物出土状況(南から)	2	3トレンチ南壁土層断面(北から)
3	7トレンチ西壁土層断面(東から)	3	3トレンチ完掘状況(北から)
4	8トレンチ東壁土層断面(西から)		
5	7トレンチ完掘状況(東から)		
6	8トレンチ完掘状況(北から)		

例言

- 本編は熊本県阿蘇郡西原村大字河原字大野に所在する河原第3遺跡の第5次調査、及び河原第6遺跡の第1次調査の概要報告である。
- 調査は熊本大学文学部考古学研究室が西原村教育委員会の協力を得て行った。
- 調査期間は2004年9月27日から10月7日の11日間である。
- 調査参加者・整理事業者は以下の通りである。
甲元眞之・小畑弘己・大坪志子(以上教員)、芝康次郎(文学研究科修士課程2年生)、中村友昭・南健太郎(以上文学研究科修士課程1年生)、今村結記(文学部研究生)、神川めぐみ・仙波靖子(以上文学部4年生)、烏津屋寛・西山絵里子・原香織・牧野幸子(以上文学部3年生)、清水恒志・高平愛子・津田勇希・平野直己(以上文学部2年生)
- 調査については以下の諸氏に御協力・御指導いただいた。
小谷桂太郎(西原村教育委員会)、岡本真也(熊本県教育庁文化課)、池田朋生(熊本県立装飾古墳館)、橘昌信(別府大学)、今田秀樹(天瀬町教育委員会)、宮縁育夫(森林総合研究所)、福田正文(敬称略)
- 本編におけるレベルは全て海拔を表し、方位は磁北を表す。
- 遺跡の位置は中扉の図に示す。図中の★は報告する2遺跡の位置を、●はその他の旧石器時代遺跡の位置を示す。なおこの図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号 平16九複、第316号)
- 土層観察表(第2図、第2表)の色調は、『新版標準土色帖』による。
- 本編の挿図と図版の遺物番号は対応する。
- 本文中における石器器種名の略称は、以下の通りである。
細石刃(MB)、ナイフ形石器(KN)、二次加工のある剥片(RF)、打面再生剥片(打再)、細石刃スポール(MBSP)、剥片(FL)、砕片(CH)、細石刃核(MC)
- 本編の編集は芝の協力のもと中村が行い、執筆分担に関しては執筆者名を文末に記した。

一 調査の目的と経過

熊本大学文学部考古学研究室は“阿蘇周辺の旧石器文化の研究”というテーマのもと、1996年から当地域での発掘調査を継続的に実施してきた。この一環として、本年度は河原第3遺跡の第5次調査と河原第6遺跡の第1次調査を行った。河原第3遺跡では、前回の調査において、多数の細石刃や細石刃核を含む石器集中部（以下細石刃石器群ブロック）の中心部を確認した⁽¹⁾。しかし、収束部分を完全には確認できなかった。そのため第5次調査は、細石刃石器群ブロックの範囲の確認を目的とした。

これまでの
調査成果

調査目的

河原第6遺跡は以前から石器採集地として知られており⁽²⁾、良好な遺物包含層の存在が予想された。今回は、土層堆積状況及び遺物の包含状態の確認を目的として試掘調査を行った。

本年度の調査は2004年9月27日から10月7日までの合計11日間実施した。

河原第3遺跡では、細石刃石器群ブロックが収束すると考えられる従来の調査区北西側に、2m×2mの調査区（7トレンチ）を設定した（第1図）。また、農道を挟んだ南側に、遺跡の範囲確認を目的とした2m×2mの調査区（8トレンチ）を設定した。なお、7トレンチと8トレンチでは約3mの比高差がある。掘り下げは、本調査の目的からⅦ層上面の検出をもって終了した。また、遺物出土地点の記録は、光波測距器と10分の1縮尺の図面とを併用して行った。土層堆積状況は、10分の1縮尺の図面に記録した。

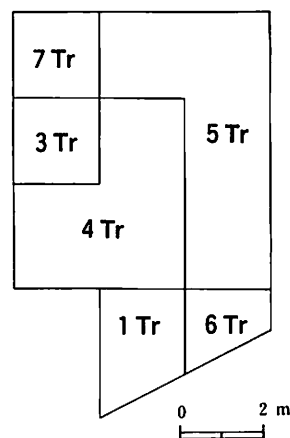
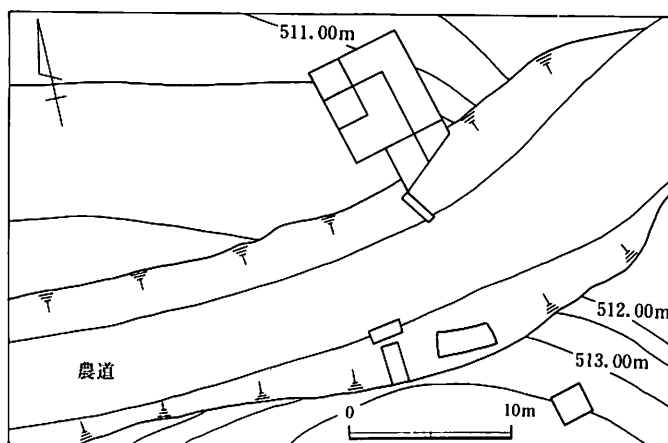
調査経過

河原第6遺跡では、道路北側に1トレンチ（1m×1m）、1トレンチから北へ2mの地点に2トレンチ（1m×1m）、1トレンチから西へ13mの地点に3トレンチ（2m×1m）を設定した。1トレンチでは約60～70cmの客土が堆積していた。同様に、2トレンチでは約80～90cm、3トレンチでは約20cmの客土が堆積していた。1・2トレンチでは、Ⅳ層上面まで掘り下げたが、調査期間内の完掘は困難であると判断した。そのため、客土があまり堆積していない3トレンチにおいて土層堆積状況を確認することにした。3トレンチでは、Ⅹ層上面まで掘り下げた。遺物出土地点、及び土層堆積状況は、10分の1縮尺の図面に記録した。なお、本調査の発掘面積は、河原第3遺跡が8㎡、河原第6遺跡が4㎡である。

（中村）

註（1） 芝康次郎編 2004「Ⅱ 河原第3遺跡3」『考古学研究室報告』第39集 熊本大学文学部考古学研究室

（2） 木崎康弘ほか 1985「Ⅳ 遺跡と遺物」『肥後考古』第5号 肥後考古学会：pp.57-62（ただし、論文の中では“西原B遺跡”として紹介されている）



第1図 河原第3遺跡調査区設定図（トーン部は第5次調査区）

二 調査の成果

A. 河原第3遺跡

1. 層序（第2図、図版1－3・4）

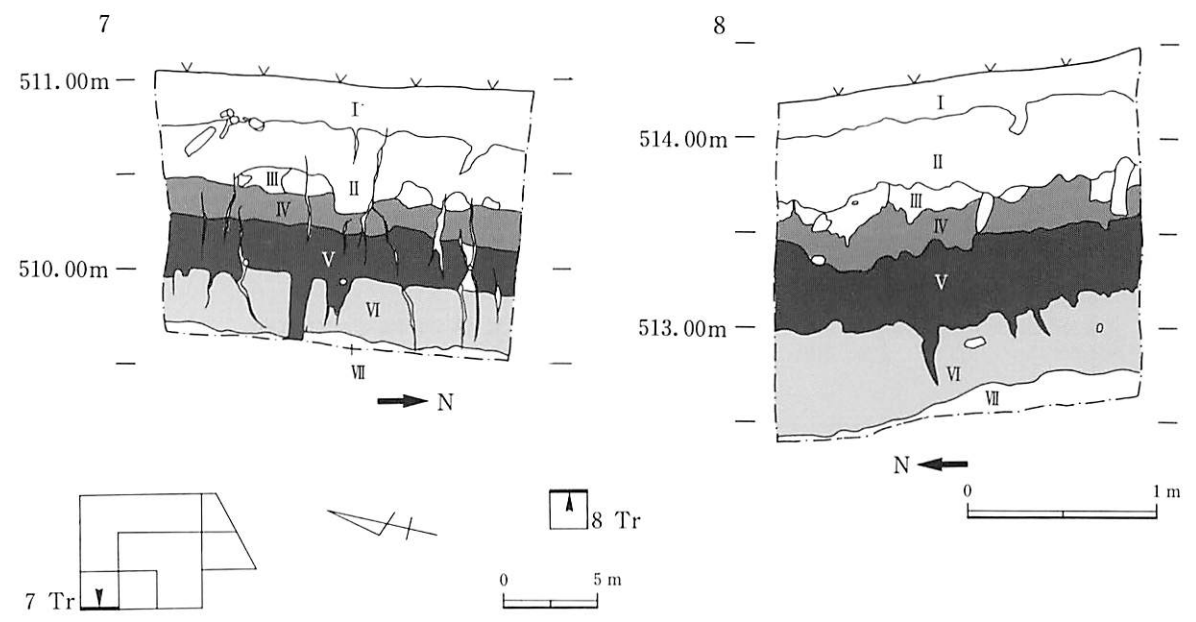
層序、文化層、及び土層の色調・特徴は前回調査のものと基本的に同じである⁽¹⁾。以下では、7・8トレンチにおける土層堆積状況を述べる。また、両トレンチ間の土層の厚さに関して比較を行う。

土層の堆積状況 7トレンチにおいては、トレンチ設定区内の樹根の影響からクラックが非常に発達しており、土層堆積は不安定である。これに対して、8トレンチにおいては、目立ったクラックもなく、土層堆積は安定している。

旧地形の傾斜 土層の厚さについては、I～IV層にかけて両トレンチ間で層の厚さにあまり差が認められないのに対し、V・VI層に関しては8トレンチの方が30cmほど厚い。このことと関連して、現地形と旧地形（細石刃石器群の包含されるVI層の上面）の傾斜角度に違いがみられる。現地形に関しては、7トレンチでは4°、8トレンチでは9°の傾斜がみられるが、旧地形に関しては、両トレンチともに傾斜角度は6°である。このことは両トレンチ付近の現地形において、特に農道南側の傾斜が著しいのに対し、旧地形においては、トレンチ設定区付近で傾斜に違いがみられないことを示している。

（津田）

註（1） 芝康次郎編 2004「Ⅱ 河原第3遺跡3」『考古学研究室報告』第39集 熊本大学文学部考古学研究室



自然層	色調	文化層
I 層	黒色土層 10YR1.7/1	表土層
II 層	褐色土層 10YR4/6	
III 層	明黄褐色土層 10YR6/8	
IV 層	暗褐色土層 10YR3/3	
V a 層	暗褐色土層 10YR2/2	
V b 層	暗黄褐色土層 10YR4/3	第1文化期
V c 層	暗褐色土層 10YR2/1	
VI 層	灰黄褐色土層 10YR4/2	
VII 層	黄褐色土層 10YR5/6	

第2図 土層断面図及び土層観察表

2. 遺物の出土状況

第5次調査で出土した遺物は総数99点である。その内訳は土器片11点、石器88点（このうち8トレンチからは土器片3点、石器13点）である。石器に関して層位別にみると、Ⅰ～Ⅴ層において7点、Ⅵ層において70点、Ⅶ層において11点出土した。前節でも述べたように、7トレンチでは樹根の影響による土層堆積状況の悪さから、遺物の上下移動が予想される。よって、層位ごとの出土石器数をそのまま文化期ごとの出土石器数と認定することはできない。

以上の土層堆積状況を考慮して、遺物の文化期への帰属は、出土層位とあわせて石材の母岩別分類から行った。前回調査と同様に、遺物の出土はⅥ層が中心である。そのため、この作業は前回報告の分類にならない、Ⅵ層の細石刃石器群と他文化期帰属の遺物との分離を行う形で進めた⁽¹⁾。その結果、文化期ごとの出土遺物数は第1表のようになる。

以下、文化期ごとに説明していく。 (島津屋)

註（1）芝康次郎編 2004「Ⅱ 河原第3遺跡3」『考古学研究室報告』第39集 熊本大学文学部考古学研究室

第1表 第5次調査出土石器組成表（上左：Ⅰ～Ⅴ層、上右：第3・4文化期、下：第2文化期）

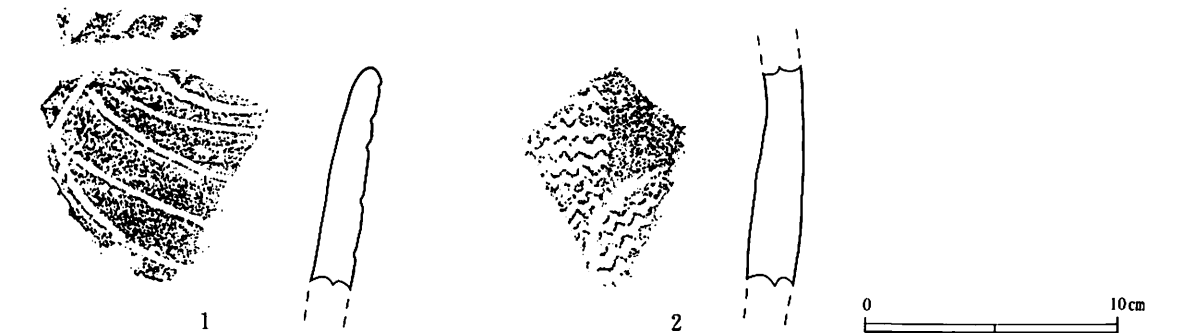
石材\器種	FL	計	石材\器種	FL	台形石器	KN	計
頁岩	1	1	その他の黒曜石		1		1
計	1	1	白色チャート	1			1
			チャート			1	1
			安山岩	1			1
			計	2	1	1	4

石材\器種	MB			RF	MBSP	打再	FL	CH	MC	計
	頭部	中間部	先端部							
黒曜石A（漆黒色黒曜石）	6	10	4		1	3	20	10	1	55
黒曜石C（乳白色黒曜石）								3		3
黒曜石D（アメ色黒曜石）			1				1	1		3
その他の黒曜石				1			2	4		7
頁岩		1					2	1		4
安山岩							4	1		5
緑色チャート							1	1		2
阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩							3	1		4
計	6	11	5	1	1	3	33	22	1	83

3. 縄文時代以降の遺物（第3図）

縄文時代以降と考えられる遺物は、土器11点、石器1点である。出土した土器の大半は小片である。そのためここでは、部位や文様を確認できた縄文土器2点について述べる。1は口縁部である。口唇部に刻目が施されている。外面には曲線と直線からなる沈線文が施されている。7トレンチⅡ層出土。2は胴部である。外面には山形押型文が施されている。8トレンチⅡ層下のレンズ状堆積中出土。

(高平)



第3図 縄文土器実測図

第5次調査
全出土遺物

文化期への
帰属

縄文時代以
降の遺物

4. 旧石器時代の遺物

(1) 遺物の出土状況と分布

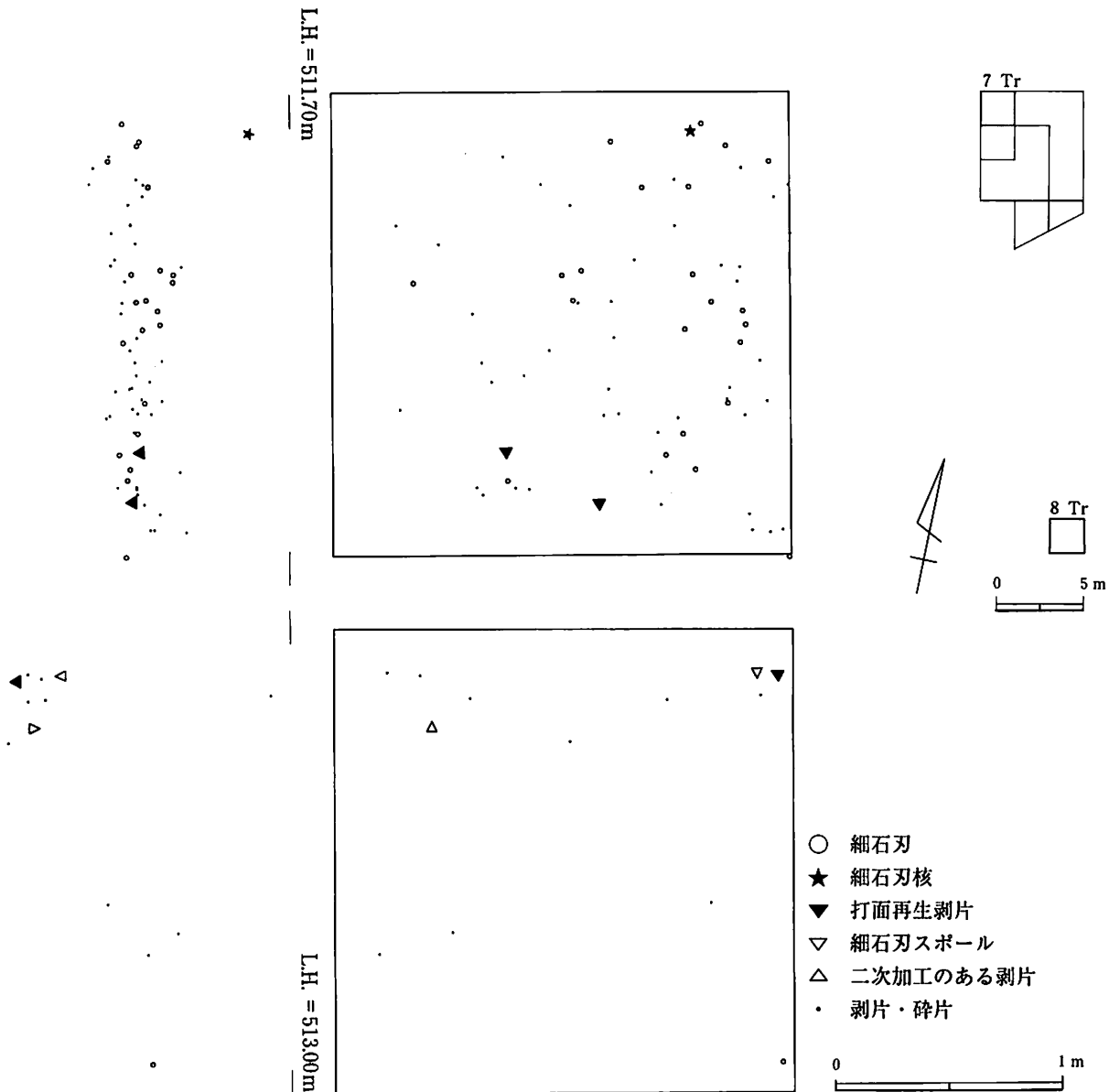
a. 第2文化期 (第4図)

第2文化期の遺物出土状況と分布

まず、7トレンチにおける遺物平面分布について述べる。遺物は調査区中央部から南東側に多く分布しており、反対に調査区中央部から北西側においては少ない。細石刃は調査区東側において密に分布している。遺物垂直分布をみると、VI層の層厚30cmにまとまって分布している。7トレンチにおける分布の特徴として、調査区の北西側に向かうにつれて遺物が少量になる点や細石刃の分布が調査区東側に偏る点が挙げられる。これらを根拠とすると、7トレンチ付近が細石刃石器群ブロックの北西側における収束部分になる可能性を指摘できる。

8トレンチで出土した石器は13点と少なく、7トレンチと比較すると明らかに少量である。遺物の平面分布をみると、調査区北側に偏る傾向がある。しかし、細石刃は1点のみであり、その出土地点も調査区南側である。垂直分布をみると、VI層中位から下位の層厚30cm内に多く分布している。

(中村)



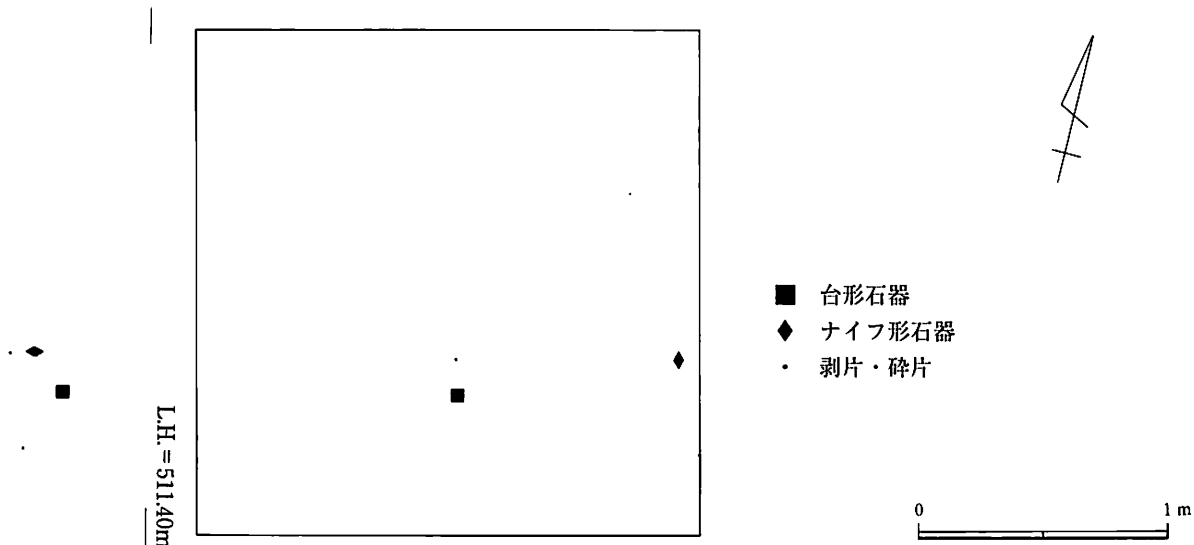
第4図 第2文化期遺物分布図 (上: 7トレンチ、下: 8トレンチ)

b. 第3・第4文化期（第5図）

第3・4文化期の遺物は、7トレンチでのみ確認された。掘り下げをⅦ層上面で終えたため出土遺物数が少ない。そのため、分布の特徴を見出すことは困難である。今回の調査においても第3文化期に位置付けられる台形石器が出土した。その出土層位はⅥ層中位である。これまでの調査においても台形石器は出土しているが、その出土層位はⅥ層中であり、細石刃石器群との層位的分離ができていない⁽¹⁾。したがって、前回報告と同様にⅥ層中に2つの文化期が包含されるものと理解しておきたい。（中村）

第3・4文化期の遺物出土状況と分布

註（1）芝康次郎編 2004「Ⅱ 河原第3遺跡3」『考古学研究室報告』第39集 熊本大学文学部考古学研究室



第5図 第3・4文化期遺物分布図（7トレンチ）

(2) 遺物（第6図）

a. 第2文化期

第2文化期に属する遺物は83点である。第6図にはそのうちの11点のみを図示した⁽¹⁾。

第2文化期の遺物

出土した細石刃は頭部6点、中間部11点、先端部5点である。完形は出土していない。頭部には全て頭部調整が認められる。そのうち6点を図示する（1～6）。7は細石刃スポールである。8～10は打面再生剥片である。8には4条、9には7条、10には2条の細石刃剥離痕が残っている。また打面再生の剥離方向をみると、8は側面側から、9・10は作業面側から剥離される。11は角柱状を呈する細石刃核である。器体の長辺側で細石刃が剥離されており、細石刃剥離作業面を観察すると、上下両方からの打撃による細石刃剥離痕を観察できる。その順序をみると、まずb面側から、次にa面側から細石刃が剥離される。また、b面をみると打面調整の痕跡がみられるのに対し、a面ではみられない。

b. 第3文化期

12は黒曜石製の台形石器である。側面が内側に湾曲し、刃部の両端には角状の突起が認められる。左側辺を欠損する。形態的に見て百花台型台形石器と類似するが、石刃を素材としていない。また、西北九州産黒曜石を用いていない点も指摘しておきたい。

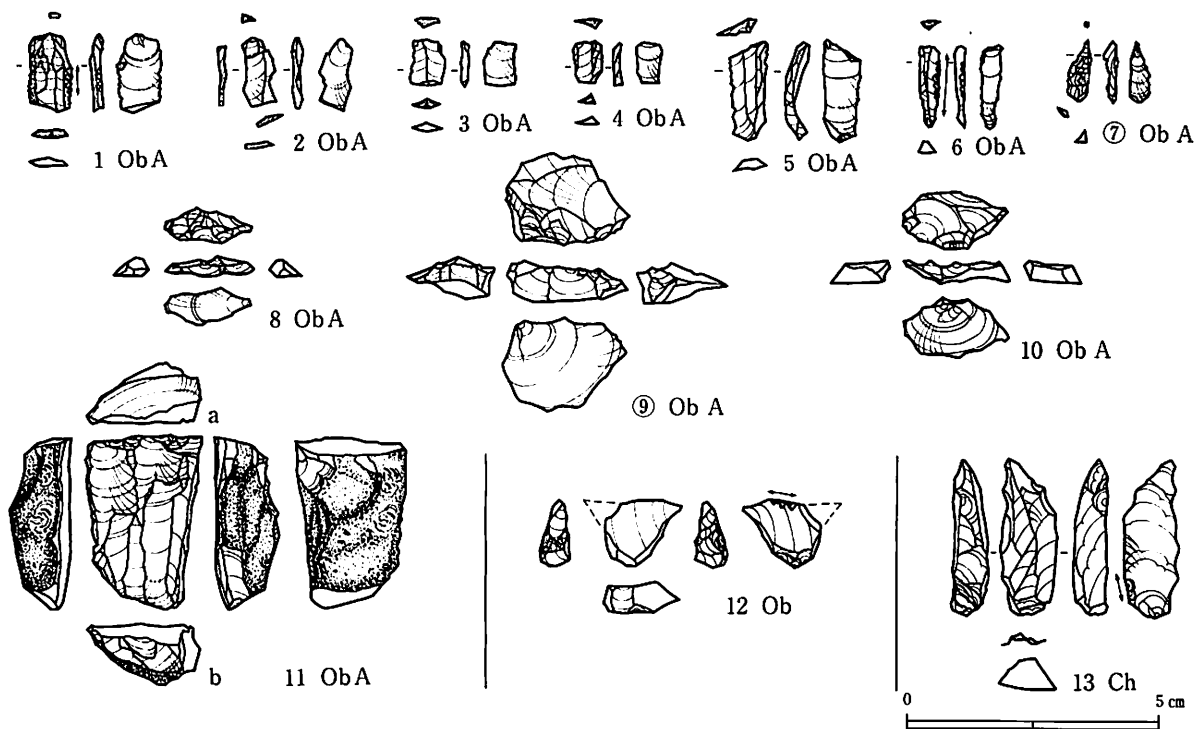
第3文化期の遺物

c. 第4文化期

13は白色チャート製のナイフ形石器である。先端部には二次加工が認められる。（清水）

第4文化期の遺物

註（1）実測図下には以下の表記を用いた。黒曜石 A = ObA, その他の黒曜石 = Ob, チャート = Ch. 8トレンチ出土の遺物には実測図下の数字に丸をつけた。



第6図 出土遺物実測図（旧石器時代）

B. 河原第6遺跡

1. 層序（第2表）

河原第6遺跡の層序

今回の調査で確認した層は、客土も含め17枚である。客土を除いて、上からⅠ、Ⅱ…Ⅹ層とした。また、Ⅰ・Ⅴ・Ⅷ・Ⅸ層は、色調の違い、土のしまり具合、粘性の違い、火山ガラスの有無などからさらに細分した。本遺跡では、Ⅲ層中にアカホヤ火山灰（以下A h、約6400年前）、Ⅷb～Ⅸb層中に始良丹沢火山灰（以下A T、約25000年前）の可能性がある火山ガラス⁽¹⁾を含む。

a. 土層堆積状況

土層の堆積状況

土層堆積状況で注意すべき点として、客土造成以前の地形に傾斜のみられる点が挙げられる。現状において、調査区内周辺では客土によって平坦地が造成されている。まず、1トレンチと2トレンチのレベルを比較し、Ⅰ層上面、Ⅲ層上面の南北方向の傾斜についてみる（第8図右）。Ⅰ層上面のレベルは、1トレンチが約40cm高い。Ⅲ層上面のレベルも、1トレンチが約35cm高い。同様に、1トレンチと3トレンチのレベルを比較し、Ⅰ層上面、Ⅲ層上面の東西方向の傾斜についてみる（第8図左）。Ⅰ層上面のレベルは、3トレンチが約55cm高い。Ⅲ層上面のレベルも3トレンチが約40cm高い。これらのことから、客土造成以前及びA h降下直後の地形において、北側と東側に傾斜していたことがわかる。

b. 河原第3遺跡との比較

河原第3遺跡との土層堆積の比較

本遺跡の土層堆積状況は、河原第3遺跡の堆積状況とほぼ同様である。しかし、Ⅴ・Ⅷ・Ⅸ層の状況や層の厚さに違いがみられた。まず、Ⅴ・Ⅷ・Ⅸ層の状況について述べる。河原第3遺跡では、Ⅴ層中に礫群を含む層が存在するが、本遺跡では存在しない。また、本遺跡では、Ⅷb層とⅨ層の漸移層（Ⅷc層）が存在する。さらに、Ⅸ層中において、色調や火山ガラスの量に違いがみられた。

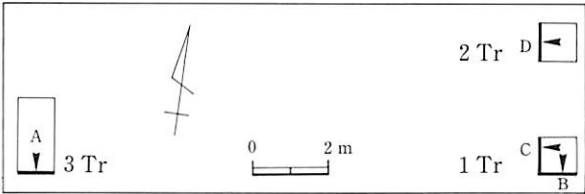
次に、層の厚さについて述べる。Ⅰ層上面からⅩ層上面までの厚さは、河原第3遺跡では約2.4m（3トレンチ）であるのに対し、本遺跡では約3.0mである。このことの要因として、本遺跡の標高が河原第3遺跡の標高に比べ、約10m低いことが挙げられる。（今村）

註（1）宮緑育夫氏から、肉眼観察ではこの火山ガラスがATに起因するものか断定できないというご教示を頂いた。そのため、ここではATの可能性があるという表現にとどめた。

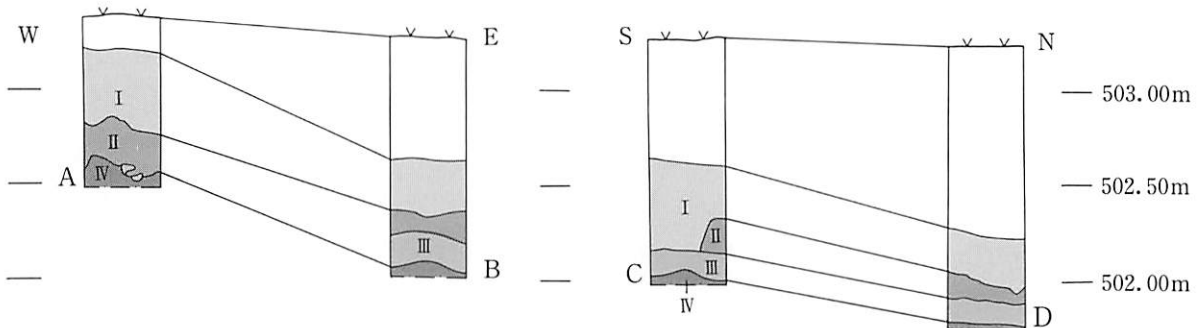
2. 遺物の出土状況

今回の調査で出土した遺物の総数は7点で、その内訳は土器片4点、陶磁器片1点、剥片2点である。層位ごとにみると、Ⅰ～Ⅱ層から、土器片4点、陶磁器片1点、剥片1点、Ⅷ層から頁岩製の剥片1点が出土した。本遺跡のⅧ層中における頁岩製剥片の出土や過去の採集遺物の存在から、旧石器時代の包含層の存在が予想される。（今村）

遺物の出土
状況



第7図 河原第6遺跡調査区設定図



第8図 各トレンチ層序比較図

第2表 河原第6遺跡土層柱状図及び土層観察表

自然層	色調	特徴
客土	褐色土層	10YR4/6 道路造成時の盛土。
Ⅰ a 層	黒色土層	10YR4/6 旧表土層。粘性はない。ややしめる。
Ⅰ b 層	暗紫灰色土層	5RP1.7/1 粘性はない。しまりがある。Ⅰ a 層とⅡ層との漸移層。
Ⅱ 層	褐色土層	10YR4/4 粘性はない。しまりがない。
Ⅲ 層	暗褐色土層	10YR3/4 K-Ah 包含層。ブロックとして包含されており、層としてはみられない。粘性はない。しまりがない。
Ⅳ 層	暗褐色土層	10YR3/3 粘性がある。しまりはない。
Ⅴ a 層	黒色土層	10YR1.7/1 粘性が非常に高い。しまりはない。
Ⅴ b 層	黒色土層	10YR2/1 粘性がある。Ⅴ a 層に比べてしまりがあり、やや明るい。
Ⅵ 層	褐色土層	7.5YR4/6 粘性がある。非常に固くしめる。クラックが発達する。
Ⅶ 層	黄褐色土層	10YR5/6 粘性がある。非常に固くしめる。Ⅵ層に比べてやや明るい。クラックが発達する。
Ⅷ a 層	黄褐色土層	10YR5/6 粘性がある。固くしめる。Ⅵ・Ⅶ層に比べてやわらかい。
Ⅷ b 層	明褐色土層	7.5YR5/6 粘性がある。固くしめる。Ⅷ a 層に比べてザラザラしている（火山ガラスか）。
Ⅷ c 層	褐色土層	7.5YR4/6 粘性がある。固くしめる。火山ガラスを含む。Ⅷ b 層に比べて暗い。Ⅷ b 層とⅨ層との漸移層。
Ⅸ a 層	暗褐色土層	7.5YR3/4 粘性がある。固くしめる。火山ガラスを多量含む。
Ⅸ b 層	黒褐色土層	10YR2/3 粘性がある。固くしめる。火山ガラスを少量含む。Ⅸ a 層に比べて暗い。
Ⅸ c 層	黒褐色土層	10YR2/3 粘性が高い。しまりがある。
Ⅹ 層	褐色土層	10YR4/6 粘性が非常に高い。しまりがない。径1～5cm程の礫を含む。

三 まとめ

A. 河原第3遺跡における調査成果

過去の成果 前回調査までに、細石刃石器群ブロックの中心及びその北東側と南西側の収束部分を確認していた。今年度調査では、細石刃石器群ブロックの範囲確認と遺跡の範囲確認を目的とし、細石刃石器群ブロックの北西側の収束部分と予想されるところに7トレンチ、さらに農道を挟んだ南側に8トレンチを設定した。

細石刃石器群の広がり 7トレンチにおいて、特にその北西側では遺物の出土数が少なく、細石刃も分布しないという特徴を見出すことができた。このことから、トレンチ付近が細石刃石器群ブロックの北西側の収束部分になる可能性を指摘できる。7トレンチにおける遺物分布に関しては、前回調査までのブロックの一部と捉えて差し支えない。

遺跡の広がり 一方、8トレンチにおいても少量ではあるが細石刃製作に関連する遺物が出土した。したがって、遺跡の範囲は少なくとも8トレンチ付近まで広がると判断できる。

ここで問題となるのは、両トレンチにおける遺物分布の関係である。8トレンチの遺物分布は、農道北側の細石刃石器群ブロックの南側の収束部分である可能性もある。しかしながら、両トレンチの比高差は3mほどあり、距離も20m以上離れている。両者が同じブロックのものとすれば、ブロックの長辺は20mになる。細石刃文化期におけるブロックの規模を考察した岩谷史記氏によれば、その規模は4～5m前後で、この傾向は密集していても散在していても変わらないという⁽¹⁾。この見解を考慮すると、両者を同一のブロックと捉えるのは困難である。現時点では、両トレンチにおける遺物分布は異なるブロックであると考えたい。

B. 河原第6遺跡における調査成果

調査の目的 今年度調査の目的は、土層堆積状況及び遺物包含状況の確認であった。

土層堆積状況 調査の結果、客土を含め17枚の土層を確認し、あわせてⅢ層中にアカホヤ、Ⅷb～Ⅸb層中にATの可能性のある火山ガラスを含むことも確認した。これを河原第3遺跡の層序と比較すると、層の厚さなどに違いはあるものの基本的に同一である。

地形の傾斜 また、客土造成以前の地形の傾斜を確認した。現状では、調査区内周辺では客土によって造成され平坦地になっている。客土造成以前の地形及びアカホヤ降灰後の地形は北東側に傾斜していたことが確認された。

出土遺物 今回の調査では、旧石器時代のものと思われる剥片が1点出土した。しかしながら、定形石器ではなく、時期は確定できていない。採集遺物からは細石刃文化期やナイフ形石器文化期の文化層の存在が予想され、今後の調査によって確認される可能性は十分ある。(中村)

註(1) 岩谷史記 1998「ブロック—遺物集中分布の視点から—」『九州の細石器文化—九州の細石器文化の石器と技術—』九州旧石器文化研究会：p. 84